



Data 2022-88

監督・脚本：フランチšek・ヴラ
ーチル

原作：ヴラジスラフ・ヴァンチュラ

出演：マグダ・ヴァーシャーリオヴ
ァー/ヨゼフ・ケムル/フラ
ンチšek・ヴェレツキー/
イヴァン・バルーフ/パヴ
ラ・ポラーシュコヴァー

👁️👁️ みどころ

“チェコ映画の最高傑作”を55年の時を経て、今！監督は、日本の黒澤明などと並び称されるチェコの巨匠フランチšek・ヴラーチルだが、さて？

舞台は13世紀、動乱のボヘミア王国だと言われても・・・？登場人物は、領主、国王、騎士の他、盗賊や元商人等々、多種多様だが、一人一人の顔と名前が一致しないうえ、相互の人間関係もサッパリ・・・。チラシに写る美女マルケータがわかるだけでは、こりやお手上げ・・・？

もっとも、映像美等は黒澤明ばりですがだから、一応星4つに。しかし、私には、本作を「映画の勝利である」などと絶賛することは、ととてもとても・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ “チェコ映画の最高傑作”を、55年の時を経て今！ ■□■

日本の黒澤明監督などと並び称される、チェコの巨匠フランチšek・ヴラーチル監督による“チェコ映画の最高傑作”と言われる本作が、55年の時を経て、日本で劇場初公開！チラシには、「制作期間10年、かつてない規模の予算で中世を忠実に再現。綿密、大胆、崇高、獐猛なエネルギーに満ちた『フィルム＝オペラ』」と書かれている。また、『キネマ旬報』7月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、3人の評論家が星5つ、5つ、4つを付けたうえ、「映画の完全なる勝利である」等の表現で絶賛している。

本作のテーマは、「中世の騒乱と肥大した信仰。少女マルケータの、呪われた恋」だから、少し難しそうだが、そこまで言われたら、こりや必見！

■□■ 原作あり！しかし、チェコ文学はサッパリ！ ■□■

日本では、ドストエフスキーやトルストイを筆頭とするロシア文学が大人気だが、チェコ文学となると、まるで知らない。しかし、1891年生まれのチェコの作家ヴラジスラ

フ・ヴァンチュラの1931年の代表作である『マルケータ・ラザロヴァー』は超有名だし、1924年にチェコに生まれたフランチšek・ヴラーチル監督は、『悪魔の罠』（62年）、『マルケータ・ラザロヴァー』（67年）、『蜂の谷』（68年）という“歴史三部作”で超有名らしい。しかし、そう言われても・・・。

■□■本作が公開された1967年当時のチェコ情勢は？■□■

本作は、1967年11月にチェコで公開されたそうだ。1967年といえば、私が大学に入学した年で、以降、ベトナム戦争反対を中心とする学生運動が高揚した時代だが、その当時のチェコはどんな政治情勢だったの？

2022年2月24日はロシアによるウクライナ侵攻の日。これは、1939年9月1日のナチス・ドイツによるポーランド侵攻と同じように、歴史上永遠に記憶される日だが、1968年8月20日には、ソ連率いるワルシャワ条約機構軍によるチェコスロバキアへの軍事侵攻が起きた。これが、いわゆる「チェコ事件」だ。本作は1950年代末からおよそ10年もの制作期間を要して作られた大作だが、それが可能になったのは、「黄金の60年代」と呼ばれた、1950年代末から60年代にかけてのチェコの社会文化状況だった。

本作のパンフレットには、①富重聡子氏（チェコ映画研究）の『『マルケータ・ラザロヴァー』のなりたちについて』、②遠山純生氏（映画評論家）の「映画作家ヴラーチル『チェコ・ヌーヴェルヴァーグ』時代を中心に」、③篠原琢氏（東京外国語大学教授（中央ヨーロッパ研究））の『『マルケータ・ラザロヴァー』の時代』、④阿部賢一氏（チェコ文学者）の「ヴラジスラフ・ヴァンチュラの小説『マルケータ・ラザロヴァー』の革新性」、という4つのコラムがあり、それぞれのタイトルについての詳しい解説があるので、これは必読！

■□■舞台は13世紀、動乱のボヘミア王国！登場人物は？■□■

連日 TV 報道されるウクライナ情勢（戦争）を見て聞いていると、ウクライナを含む東欧諸国や中東諸国についての知識が少しは身についてくる。また、1939年のナチス・ドイツによるポーランド侵攻や1968年のチェコスロバキアを舞台とした“プラハの春”等については、多少の知識はある。しかし、本作の舞台が13世紀、動乱のボヘミア王国と言われても・・・。

ちなみに、日本のバブル真っ盛りの1983年に大ヒットしたのが葛城ユキが歌った『ボヘミアン』。ボヘミアとは、ヨーロッパのヴルタヴァ川流域の盆地を指すラテン語の地名。そして、ボヘミアンとは、ボヘミアに由来するさまざまなもののことだ。私は“ボヘミア”についてこの程度の知識しかないが、さて、本作の理解は？他方、本作には、領主、国王、騎士の他、盗賊や元商人まで多種多様な人物が登場するうえ、その人間関係はややこしい。もっとも、本作の主人公はチラシに写っている美少女マルケータ（マグダ・ヴァーシャーリオヴァー）のはずだから、それに注目！

■□■こりゃ難解！設定も物語もサッパリわからん！■□■

連日報道されているウクライナ情勢（戦争）の中、ウクライナ東部や南部の州や都市の名前、その位置関係等が十分わかってきた。しかし、私に13世紀半ば、動乱のボヘミア王国についての知識はない。したがって、本作のパンフレットでは、「Part I 狼男 ストラバ」「Part II 神の子羊」のストーリーが詳しく解説されているが、そのほとんどはスクリーンを見ているとサッパリわからない。名前と顔、そしてその特性を一度見ただけで覚えられるはずはないから、さまざまなストーリー展開の中で同じ顔が二度、三度登場しても、誰が誰だったかサッパリわからない。そのため、ストーリー展開もサッパリ……。ただわかるのは、時々登場する美しきヒロイン、マルケータの顔だけが、マルケータが誘拐されて凌辱されたことすらよくわからない。そして、マルケータが誰を愛しはじめたのかもサッパリ……。これだけ難解では、いくら“チェコ映画の最高傑作”と絶賛されても、お手上げ……。

■□■大層な誉め言葉もあれば、ボロクソ評価も！■□■

前述したように、『キネマ旬報』7月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」に見た3人の評論家の評価は星5つ、5つ、4つで絶賛している。しかし、私には13世紀半ば、ボヘミア王国を舞台とした、こんなにストーリーのわからない映画は全然面白くない。映像の素晴らしさや映画製作・映画技術の面における素晴らしさは認めるとしても、ストーリーの面白さがなければ、私はその映画を褒めることはできない。

そんな目で、好きなことを好きなように書けるネット上での本作の評価を調べてみると、一方で、「結論、本作品は全てが素晴らしい稀有な映画だ。」と絶賛している、東欧/旧ユーゴ/ロシア/サイレント映画愛好家、Knights of Odessa さんのウェブサイト「フランチェク・ヴラーチル『マルケータ・ラザロヴァー』純真無垢についての物語」がある。

しかし、他方、あるワあるワ、私と同じような感覚のボロクソ評価も！その一つが、ニューヨークブルックリン在住のガロンさんの「ガロン単位で映画を考える」における本作についてのブログ「チェコのベスト映画・・・なのか？『マルケータ・ラザロヴァー』」だ。そこでは、「実験しすぎて、自然さのない人為的にこねくりまわしすぎたものになってしまった気もするが……。」と書かれており、私はこれに同感！

2022（令和4）年8月1日記